『明月記』における春尽日・秋尽日の記事について

――表現方法の変化――

藤川功和

はじめに

稿者は前稿で、文治四年（一一八八、定家二十七歳）の時の記事を中心に、そこから伺われる定家の日記における文学的操作の一事例を述べた。前稿で注目したのが九月晦、つまり季節の変わり目にあたる記事だったことから、そのことを足掛かりにして、本稿では考察範囲を『明月記』全体の四季の尽日の記事に広げ、定家が季節の変わり目に際して自己の感慨をどのように日記に表現しているのかについて考察する。そしてそこから伺われる『明月記』における表現上の特質を明らかにしたい。

ただ『明月記』における四季の尽日の記事を概観したところ、定家が尽日にあたって自らの感慨を記すといったことはその殆どが春尽日・秋尽日に集中しており、定家の季節の変わり目に対する意識は多く春、秋に集中している。[1] そこで本稿では特に春尽日・秋尽日を考察の対象とした。

一　『明月記』及び『玉葉』における春尽日秋尽日に関する記事

まずは『明月記』全体における春尽日・秋尽日に関する記事を本文の現存状況と合わせて一覧してみた（次ページ以下〔表Ⅰ〕）。

以下、表を一覧すると、一つには必ずしも毎年春尽日、秋尽日に対して定家が自己の感慨を記述しているわけではないことが分かる。又記事自体が存しない年も多くあり一概には言えないが、例えば正治元年から承元二年までの十年間と、嘉禄元年から嘉禎元年までの十年間を比較した場合、前者は十年間で何らかの記述をしているのが六回と、約三分の一の割合であるのに対して、後者は十年間で何らかの記述があるのが十回と割合が二分の一と増加していて、承久年間辺りを境に一つの時期区分が出来そうである。

定家の生涯の時期区分に関しては、早くは石田吉貞氏が検討されており、[2] ここでも本来なら定家の実生活、或は定家の実作の面からも検討を加えねばならないが、今回は記事を限定していることもあり、暫定的に文治年間までを青年期、建久年間を壮年期、正治以降、承元年間までを中年期、建暦以降、承久年間までを初老期、それ以後を老年期と大別しておく。

さて、では次に『明月記』に見られたような春尽日・秋尽日に関する記述が他の公家日記でも同様に見られるのかを確認するために、ほぼ同時代の日記である『玉葉』を概観してみた（〔表Ⅱ〕）。

〈春尽日、秋尽日に関する記述年表〉

（凡　例）

「春尽日・秋尽日に関する記述の有無」について、

・上段の◎は、三月・九月の記事自体が存し、なおかつ晦の記事も存する場合。

・同じく○は、三月・九月の他の日の記事は存するが、晦の記事は見られない場合。

・同じく※は、三月・九月の記事が全く欠脱している場合

・下段の○は、春尽日・秋尽日に関する記述が有ることを、●は、それらの記述が無いことを表す。

（表Ⅰ）『明月記』

年号（西暦）	年齢	春尽日・秋尽日に関する記述の有無		
治承四年（一一八〇）	19	三月晦	◎	○
		九月晦	○	
治承五年（一一八一）	20	三月晦	○	
		九月晦	○	
〈七か年欠〉				
文治四年（一一八八）	27	三月晦	※	
		九月晦	◎	
〈二か年欠〉				
建久二年（一一九一）	30	三月晦	※	
		九月晦	※	
建久三年（一一九二）	31	三月晦	◎	●
		九月晦	※	
〈三か年欠〉				
建久七年（一一九六）	35	三月晦	○	
		九月晦	※	
建久八年（一一九七）	36	三月晦	※	
		九月晦	※	
建久九年（一一九八）	37	三月晦	※	
		九月晦	※	
正治元年（一一九九）	38	三月晦	◎	○
		九月晦	◎	●
正治二年（一二〇〇）	39	三月晦	◎	○
		九月晦	◎	●
建仁元年（一二〇一）	40	三月晦	◎（※※あり）	
		九月晦	○	
建仁二年（一二〇二）	41	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	○
建仁三年（一二〇三）	42	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●

年	番号	月		
元久元年(一二〇四)	43	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	○
元久二年(一二〇五)	44	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
建永元年(一二〇六)	45	三月晦	※	
		九月晦	◎	●
承元元年(一二〇七)	46	三月晦	◎	○
		九月晦	◎	○
承元二年(一二〇八)	47	三月晦	◎	●
		九月晦	○	
〈二か年欠〉				
建暦元年(一二一一)	50	三月晦	※	
		九月晦	◎	●
建暦二年(一二一二)	51	三月晦	※	
		九月晦	◎	●
建保元年(一二一三)	52	三月晦	※	
		九月晦	◎	○
		閏九月晦	◎	○
建保二年(一二一四)	53	三月晦	◎	●
		九月晦	※	
建保三年(一二一五)	54	三月晦	※	
		九月晦	◎	●
建保四年(一二一六)	55	三月晦	※	
		九月晦	※	
建保五年(一二一七)	56	三月晦	◎	●
		九月晦	※	
建保六年(一二一八)	57	三月晦	※	
		九月晦	※	
承久元年(一二一九)	58	三月晦	※	
		九月晦	※	
〈五か年欠〉				
嘉禄元年(一二二五)	64	三月晦	◎	●
		九月晦	※	
嘉禄二年(一二二六)	65	三月晦	○	●
		九月晦	◎	○
安貞元年(一二二七)	66	三月晦	◎	●
		閏三月晦	◎	○
		九月晦	◎	○
〈一か年欠〉				
寛喜元年(一二二九)	68	三月晦	◎	○
		九月晦	◎	○
寛喜二年(一二三〇)	69	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	○
寛喜三年(一二三一)	70	三月晦	◎	○

〔表Ⅱ〕『玉葉』

年号（西暦）	年齢	春尽日・秋尽日に関する記述の有無			
長寛二年（一一六四）	16	三月晦	※		
		九月晦	※		
仁安元年（一一六六）	18	三月晦	※		
		九月晦	※		
仁安二年（一一六七）	19	三月晦	○		
		九月晦	※		
仁安三年（一一六八）	20	三月晦	○		
		九月晦	◎	●	
		九月晦	※		
貞永元年（一二三二）	71	三月晦	※		
		九月晦	◎		○
天福元年（一二三三）	72	三月晦	◎	○	
		九月晦	※		
文暦元年（一二三四）	73	三月晦	○		
		九月晦	◎	●	
嘉禎元年（一二三五）	74	三月晦	◎	○	
		九月晦	◎	○	
		九月晦	※		
嘉応元年（一一六九）	21	三月晦	※		
		九月晦	※		
嘉応二年（一一七〇）	22	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
承安元年（一一七一）	23	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
承安二年（一一七二）	24	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
承安三年（一一七三）	25	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
承安四年（一一七四）	26	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
安元元年（一一七五）	27	三月晦	◎		
		九月晦	○		
		閏九月晦	◎	○	
安元二年（一一七六）	28	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
治承元年（一一七七）	29	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
治承二年（一一七八）	30	三月晦	◎		
		九月晦	◎		
治承三年（一一七九）	31	三月晦	◎		

年	番号	月	上段	下段
		九月晦	◎	●
治承四年(一一八〇)	32	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
養和元年(一一八一)	33	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
寿永元年(一一八二)	34	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
寿永二年(一一八三)	35	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
元暦元年(一一八四)	36	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
文治元年(一一八五)	37	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
文治二年(一一八六)	38	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
文治三年(一一八七)	39	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
文治四年(一一八八)	40	三月晦	◎	●
		九月晦	○	
文治五年(一一八九)	41	三月晦	○	
		九月晦	○	
建久元年(一一九〇)	42	三月晦	○	

年	番号	月	上段	下段
		九月晦	◎	●
建久二年(一一九一)	43	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
建久三年(一一九二)	44	三月晦	○	
		九月晦	○	
建久四年(一一九三)	45	三月晦	○	
		九月晦	※	
建久五年(一一九四)	46	三月晦	○	
		九月晦	○	
建久六年(一一九五)	47	三月晦	◎	●
		九月晦	◎	●
建久七年(一一九六)	48	三月晦	◎	●
		九月晦	※	
建久八年(一一九七)	49	三月晦	○	
		九月晦	※	
建久九年(一一九八)	50	三月晦	※	
		九月晦	※	
正治元年(一一九九)	51	三月晦	※	
		九月晦	※	
正治二年(一二〇〇)	52	三月晦	※	
		九月晦	◎	●

『玉葉』は言うまでもなく、定家の主家たる九条兼実によって記された日記である。記事は長寛二年（一一六四、十六歳）から正治二年（一二〇〇、五十二歳）の時まで見られ、途中欠脱も存するものの、記事の分量としては『明月記』と比しても遜色のないものである。だが実際に三月晦、九月晦の記事を見てみると、春尽日・秋尽日に対する兼実の特別な感慨といったものは本文上に殆ど見られない。

また、例えば、表で安元元年（一一七五）の閏九月晦に関して見てみると、春尽日に対する記述の有る例として表にはあげているが、実際には左の〔資料1〕のように、春尽日に即して種々の興を凝らし、和歌、連歌等が催された事実のみが記されており、その日に関しての兼実の思い入れのようなものは本文上に殆ど表れていない。

〔資料1〕『玉葉』安元元年閏九月二十九日条

廿九日、丁丑入夜雨降、今日、密々有和歌、季経朝臣已下、常祗候、男共六七許輩、又有当座、其後有連歌、又有折句、隠題、旋頭、混本等歌、各入興、及天曙、分散、閏九月尽、頗邂逅事也、仍密々講之、

（本文は国書刊行会本による）

このように『明月記』と『玉葉』を比べてみると、三月晦、九月晦が特別な日として当時の人々に意識され、それ故その日に種々の催しが往々にしてあったことが分かる一方で、春尽日、秋尽日に対して自らの感興を記すということ自体は、記主によって差が見られ、必ずしも公家日記全般に見られる特色ではないことが分かるかと思われる。それでは次に『明月記』における春尽日・秋尽日に関する記述を年齢を追って個々に検討を加えてみる。

二　青年期における春尽日・秋尽日に関する記述

先に掲げた表からも伺われるように、青年期における晦の記事は殆ど見られない。これは一つには青年期における記事の現存状況が悪いこととも関係しているが、そういった中ではっきりと定家の感慨が本文上に現れている記事を挙げる。

〔資料2〕『明月記』文治四年九月二十九日条（二十七歳）

廿九日、壬戌、天陰、入夜雨降、良辰徒暮、依難黙止、黄昏参殿富門院、与大輔清談、漸及亥時、無人寂寞、欲退出之間、忽門前有松明之光、有参入之人、内外相驚、権中将参入、被語云、已欲付寝之間、庭前之木葉忽落、聞嵐音遂不能寝、忽出騎馬所参也、存人不可候由之間、見件車感涙相催之由、女房感悦、更又掌燈、連歌和歌等、新中納言尾張等相加種々狂言等、及鶏鳴数声、雨漸滂沱、遠路天明者不便之由、被急出（ ）猶徘徊、空階雨滴之句数返、借笠退出、帰蓬間天漸曙、

（本文は国書刊行会本による。以下同じ）

九月の晦、つまり秋の去り逝く日を「難黙止」と、一人で過ごすのに耐え切れなくなった定家は殿富門院の許に参り、殿富門院大輔と「清談」に及ぶ。そして「亥時」になり退出しようとした時、定家同様寝つけないでいた権中将藤原公衡が参入する。そこで逝く秋の日を皆で興を凝らして過ごそうと「連歌、和歌等」が催され、「鶏鳴数声」

と、明け方近くになる。雨が降りしきる中公衡は一足早く退出し、定家は「猶徘徊」し、「空階雨滴之句数返」と、左の〔資料3〕にもあげた『和漢朗詠集』所収の漢詩の一節を口ずさむ。

〔資料3〕『和漢朗詠集』巻上・三〇七・落葉

三秋而宮漏正長　空階雨滴　万里而郷園何在　落葉窓深　巻軸

（本文は「新潮日本古典集成」による。以下同じ）

その後定家も笠を借り女院の許を退出するが、ここで特に注目されるのは、定家が「空階雨滴」の句を口にしたことと、なおかつそのことを日記にまで書き留めたことであろう。『源氏物語』にも見られるごとく、物語の登場人物がもの思いに耽る場面では往々にして漢詩の一節を口ずさむという描写がなされている。

その中でもとりわけ『明月記』の当該記事と似通った状況が見てとれるのが、左の〔資料4〕にあげた『狭衣物語』の一場面である。

〔資料4〕『狭衣物語』巻二

九月も晦日になりぬれば、「ただ今日明日ばかりこそは」と、いとど吹きそふ木枯しも身にしみまさりて、もの心細くながめ臥したまへるに　～（中略）～

夕霧絶え間なきに、時雨だちて、折々うち暗がりたる空の気色ものむつかしければ、入らせたまひて、「御格子まゐれ」などあれど、つくづくながめたまひて、「宮漏正に長し、空階に雨滴る」と忍びやかに誦したまへる御声、常のことなれど、なほ聞くごとにめづらしくめでたければ、若き人々などは、奥へもえ入り果てず、賞で入りて群れゐつつ、「このごろこそいみじうものおぼしたる気色なれ。何事ならむ」なども言ひあはすべし。

（本文は「新潮日本古典集成」による。以下同じ）

ここでは、主人公狭衣大将が、想い人源氏の宮の入内が近くなる中、秋の逝く日、時雨の降りしきる中、もの思いに耽りつつ、「宮漏正に長し、空階に雨滴る」と、漢詩の一節を口ずさんでいる。先の『明月記』の記事と比較すると、九月の晦である点、雨が降りしきる中、「空階雨滴」の漢詩を口にしている点が共通している。文治年間辺りの定家詠には『狭衣物語』の影響が見てとれるものもあり、文治四年のこの日に定家が「空階雨滴」の句を口にしたのも、『狭衣物語』の一場面を想起したものと考えられる。

先程も述べたように青年期においてはっきりと逝く季節に対する感慨が記されている例は先の文治四年の記事のみであるが、表には示さなかったが、間接的に『和漢朗詠集』或は物語の影響を想起させる記事は他に全くないわけではない。

〔資料5〕『明月記』治承四年三月三十日条（十九歳）

卅日、天晴、向法性寺、右武衛被渡、見藤花、

日記には藤原家通と共に法性寺に参って藤の花を見た由が記されている。記事そのものは簡潔だが、ここで特に注目したいのは三月晦の日に定家が藤の花を見る行動に出ていることであろう。定家がこの日にわざわざ藤の花を見に行ったのは、一つには、左にあげた〔資料6〕の『和漢朗詠集』所収の『白氏文集』の一節に影響を受

けたことが考えられる。

〔資料6〕『和漢朗詠集』巻上・一三三・藤

恨望慈恩三月尽　紫藤花落鳥関々　白

またこれは少々深読みかも知れないが、先の文治四年の記事との繋がりで考えるとすれば、『狭衣物語』の冒頭場面に何らかの喚起を促された行動とも考えられる。(3)

いずれにしても、当該記事と言い先の文治四年の記事と言い、この時期の定家は物語の一場面や漢詩の一節に触発されることが往々にしてあり、さらには興に引かれて自ら取った行動を日記にそのまま記してしまうといった非常に多感な時期にあり、日記本文にもそういう彼の感性が往々にして顔を覗かせることがあったようである。

二　壮年期、中年期における春尽日・秋尽日に関する記述

次に壮年期、中年期についてであるが、壮年期については記事の欠脱が多く殆ど見ることができない。本格的に記事を見ることができるのは、中年期になってからである。その中年期の最初の用例が左の〔資料7〕である。

〔資料7〕『明月記』正治元年三月二十九日条（三十八歳）

廿九日、晦、辛酉、天晴、午後雷鳴、大雨休止之後猶陰、湯治如日来、蟄居寂寞、九春之節空暮、

この日以前の三月二十二日から定家は腰を患っていた。痛みがひどいらしく「不能動身」と体を動かせないほどであった。以後、焼石をあてたり湯治を行ったりと手を尽くしている。そのように腰の治療に専念した定家は「蟄居寂寞」と何もしないままに、三月晦の日を迎えてしまう。「九春之節空暮」と表現は簡潔だが、特に「空」辺りには病を患いなす術のない定家の焦燥といったものが読み取れる。

〔資料8〕『明月記』正治二年三月三十日条（三十九歳）

卅日、（中略）今日艶陽尽日也、雖尤可翫風景、世間之体只懸越後小所之殊問答、送此日、可恥可悲、奈古賢之心何、（後略）

右の文中「只越後小所」とあるのは、定家の所領の一つで、同月二十二日条にも「連々甚雨」とあるように水害に悩まされたらしく、定家はその対応に追われ、この日を送っている。本来「雖尤可翫風景」であったのに、生活に追われ空しく春を送ってしまった事へのいら立ちのようなものが感じられる。

〔資料9〕『明月記』建仁二年九月三十日条（四十一歳）

卅日、天陰時雨、若州返馬、還御了云々、九秋之節已暮、

この月の十日に定家は水無瀬殿に参り後鳥羽院より一足早く十六日には帰京していた。この頃定家は既に院の設置した和歌所の寄人にもなり、後鳥羽院歌壇において重要な位置を占めつつあった。それだけに院が水無瀬殿にいる間も、「今日猶無還御云々」（同月二十九日）と、後鳥羽院の動静を気にかけており、官人として何かと気ぜわしい生活に追われていたことがわかる。「九秋之節已暮」にはそ

ういった実生活に追われるまま秋が過ぎ去ってしまったことに対する感慨が込められている。

〔資料10〕『明月記』元久元年九月三十日条（四十三歳）

卅日、晦、暮雨、病気無減、金商已尽、

定家はこの日に先立つ二十三日から「咳病悩」、以後も、「心神悩」（二十四日条）という状態が続き、「病気無減」のままこの日を迎えた。体調が優れないせいであろうか、日記には「金商已尽」と、秋が過ぎ行くことが簡潔に記されているのみである。

〔資料11〕『明月記』承元元年三月三十日条（四十六歳）

卅日、（中略）四十六時三月尽、空過似夢、

二日前の二十八日から定家は水無瀬殿に参っていた。参ったその日と、翌二十九日には「御鞠」と蹴鞠が催されただけで、定家は仕方なくその場にいたという感じで、特に二十九日には「又御鞠」と、うち続く蹴鞠へのいら立ちの様なものも感じられる。それに続いてこの三十日条の中略部分では、院の許に参った時に人々から聞いた噂話ばかりが記されている。せっかく水無瀬殿まで参ったはいいものの、慌ただしい中でなす事もなく春を送らなければならない我が身の歯がゆさのようなものが、「四十六時三月尽～」以下によく表れている。また左の〔資料12〕では定家が病に苦しむ中、空しく秋を送ることに対する嘆きが記されている。

〔資料12〕『明月記』承元元年九月二十九日条（四十六歳）

廿九日、晦、天晴、病与愁計会、空送蕭条之節、（後略）

さて、中年期における用例で最後に注目したいのが、左の〔資料13〕の記事である。

〔資料13〕『明月記』建保元年閏九月二十九日条（五十二歳）

廿九日、晦、雨降、未後休、入夜又微雨、終夜滴階、（後略）

「入夜又微雨、終夜滴階」と、定家は閏九月晦の晩に雨が降っている状況を記しているが、特に雨が「終夜滴階」と記述している個所は、先の文治四年で定家が自ら口ずさんだ「空階雨滴」の漢詩の一節を念頭に置いた表現と考えられる。既に久保田淳氏によって指摘されているように、定家は特にこの漢詩を愛好していたようで、和歌の実作にもこの漢詩を踏まえた歌が左の〔資料14〕にもあげているように三首程見られる。

〔資料14〕定家詠における「空階雨滴之句」摂取

○『拾遺愚草』巻中・仁和寺宮五十首・一六五八（三十七歳）

秋十二首

ひとりきく空しき階に雨おちてわがこしみちをうづむこがらし

（本文は『訳注藤原定家全歌集』による。以下同じ）

○『拾遺愚草員外』三三一二（五十九歳）

雨

軒の雨のむなしき階をうつたへにねられぬ夜はの秋ぞつれなき

○『拾遺愚草員外』四〇九九（詠歌年次未詳）

雨中吟

暮の秋はしにしたゝる夜の雨草の庵の内ならねども

当該記事に関しても「空階雨滴」を踏まえた表現と考えられるが、当該記事を文治四年の記事と比較した場合、文治四年の記事に見られたような、定家自らが漢詩の一節を口ずさむといった記述は既になく、「終夜階滴」と言った一種の慣用的表現として記されている点が注目される。

さて、ここまでが定家中年期の春尽日・秋尽日に関する記述である。特徴としては、季節の移り変りに対する定家自身の感慨が「九春之節空暮」といった簡潔な表現で記される傾向にあること、但し、表現は簡潔ながらもその表現の裏には官人としての生活に追われる我が身を嘆いたり、身体的な障りに対するいら立ちをも含んだものが多いことが指摘できる。また〔資料13〕のように、青年期と同一典拠を踏まえた場合でも、青年期のように自身を物語の登場人物にしたてるという記述はなくなっている。それでは引き続き定家初老期、老年期における記事について検討を加える。

三　初老期、老年期における春尽日・秋尽日に関する記述

次に初老期、老年期についてであるが、初老期については壮年期と同様にあまり記事が見られない。ただ壮年期との違いは晦日の記事自体はある程度残っているものの、それらには殆ど定家の述懐といったものが記されていないことである。欠脱も多いので一概には言えないが、あるいは初老期にはあまり自己の述懐を記さなかったのかも知れない。

次に老年期であるが、先に述べたように老年期は主に承久の乱後ということになる。この頃の定家は文学活動においては和歌の実作が減り、代わりに連歌会に多く参加するようになるが、歌壇での地位は揺るぎないものになっていた。また社会生活の面においては、貞応元年（一二二二）には参議を辞し、従二位に叙せられ、最終的には正二位に至り、権中納言にも任ぜられる。また、息為家も嘉禄二年（一二二六）には早くも参議兼侍従に任ぜられるなど、定家の老年期は色々な意味で大旨安定期と言ってよいであろう。ではこの期間の記事を見てみると、左の〔資料15〕から〔資料17〕までの三例に見られるごとく、病身に引きつけて逝く季節への心情を吐露するという記述態度は初老期から一貫して見られる。

〔資料15〕『明月記』嘉祿二年九月三十日条（六十五歳）

卅日、（中略）暑熱之間、忘他事平臥、適涼気之後、灸等又辛苦、不覚而及九秋之尽、浮生老後可悲可痛、（後略）

〔資料16〕『明月記』寛喜二年九月三十日条（六十九歳）

卅日、（中略）暮天遠晴、秋景空過、依思病身、重悲再会之難、

〔資料17〕『明月記』寛喜三年三月三十日条（七十歳）

卅日、（中略）老病遂無減、而春景空尽、（後略）

ただもう一方では初老期には見られなかった表現方法が見られる。

〔資料18〕『明月記』安貞元年九月三十日条（六十六歳）

卅日、（中略）南院南築垣之内、紅葉如張錦、九秋已暮、惆恨

何為、只対菊蕊之孤叢、悲蕭瑟之短晷、

〔参考〕

○『白氏文集』巻四・陵園妾

陵園妾陵園妾顔色如花命如葉（中略）眼看菊蕊重陽涙（後略）

（本文は『金沢文庫本白氏文集』による）

○『新撰朗詠集』巻上・三五二・菊

九月廿七日、孰不謂之尽秋　孤叢両三茎孰不謂之残菊〃

（本文は「古典文庫」による）

○『和漢朗詠集』巻上・五二・三月尽

惆悵春帰留不得　紫藤花下漸黄昏〃

○『和漢朗詠集』巻上・二七四・九月尽

縦以崤函為固　難留蕭瑟於雲衢　縦令孟賁而追　何遮爽籟於風境〃

この日定家は仁和寺御室法助法親王の許に参った。中略以下の引用文はその帰途に関しての記事である。「紅葉如張錦」という表現は、仁和寺からの帰りがけに定家が見たいわば実景を描写したものであろう。そしてさらに「九秋已暮」以下で逝く秋への自身の心情を吐露している。特に「対菊蕊之孤叢、悲蕭瑟之短晷」の個所は明らかに対句の形になっており、(4) さらに発想や用いた語句等が『白氏文集』あるいは『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収の漢詩等から何らかの影響を受けている点は注意される。(5) そして同様な表現は〔資料19〕・〔資料20〕あるいは〔資料21〕等からも伺われる。

〔資料19〕『明月記』寛喜元年三月二十九日条（六十八歳）

廿九日、（中略）九旬之艶景空過、八重之紅桜猶残、徒望閑庭、独痛心府、

〔資料20〕『明月記』寛喜元年九月三十日条（六十八歳）

卅日、（中略）菊蕊初綻、萩花尤盛、閑庭只望之、不図六十八年之秋、又如夢過、

〔資料21〕『明月記』寛喜三年九月二十九日条（七十歳）

二十九日、（中略）秋日早没、暮雲僅聳、菊蕊初開、蛬声猶残（後略）

例えば〔資料19〕では、「九旬之艶景空過」が「八重之紅桜猶残」と対句になっており、〔資料20〕では「菊蕊初開、蛬声猶残」と、菊の花の咲き始めた様と去り逝く秋の中次第に衰えていく虫の音の様とがやはり対句形式で記述されている。

〔資料22〕『明月記』天福元年三月三十日条（七十二歳）

卅日、（中略）風雨之景気無春尽之色、損枝緑樹之中牡丹独盛開

〔参考〕

○『和漢朗詠集』巻下・七〇八・妓女

莫恠紅巾遮面咲　春風吹綻杜丹花〃

また右の〔資料22〕では、この日以前からの強風のため本来夏の到来を告げるべき「緑樹」が「損枝」じ、「無春尽之色」しと、まるでまだ春が終わらない季節のように見える中、牡丹の花だけが咲き誇っ

ている様子が記されている。この日以前の二十八日にも定家は日記に「天晴、牡丹盛開」と記していることから単なる風景描写ともとれるが、特に風が吹く中での牡丹の美しい様子を記述している個所は、『和漢朗詠集』で美しい女性が紅い布で顔を隠している様を春風に咲き始めた牡丹に例えている漢詩と、直接的な繋がりはないものの、牡丹の美しさを風との関わりの中で表現している点では似通っていると思われる。

〔資料23〕『明月記』文暦元年九月二十九日条（七十三歳）

廿九日、乙丑晦、繊月如絲出山丈余天曙、草木蕭条、漸陽空暮、

〔資料24〕『明月記』嘉禎元年三月二十九日条（七十四歳）

二十九日（中略）春景已尽、鐘漏漸闌、

〈参考〉

○『和漢朗詠集』巻上・二八六・蘭

前頭更有蕭条物　白菊衰蘭三両叢

○『和漢朗詠集』巻上・二三四・秋夜

遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

さらに右の〔資料23〕〔資料24〕ではそれぞれ春・秋の去り行く状況が簡潔に記されているだけだが、特に「蕭条」は中年期末期、「鐘漏」は初老期にならないと見られない。[6]

このように、老年期では、対句表現を用いたり、或は直接何らかの典拠を踏まえるまではなくても、表現の面で極めて漢詩的な語句を用いて記述するという態度が見られる。こうして見てみると、中年期では割に簡潔な表現で三月尽・九月尽を契機に自己の憂いを表現していたものが、老年期になると中年期と同様な記述態度が見られる一方で、対句表現や漢詩で用いられる表現を取り入れる記述態度がもう一方では見られる。このことについて一つ興味を引かれるのが、『明月記』における漢詩と定家との関わりについて次のように言及された佐藤恒雄氏の御論稿である（「藤原定家の漢詩」『新古今集と漢文学』平4　汲古書院）。

嘉禄のころからは、九条家での作文会や歓会での詠作をこなし、寛喜年間以降になると、徐々に歎老の思い、旧遊零落の嘆きなど、内面化してゆく自らの心情や感懐を、多くの和歌作品として形象化する一方で、漢詩の形式をもっても十分に表現しうるまでになっているのである。

老年期に見られた春尽日・秋尽日に関する表現方法における特徴も、可能性の一つとしては漢詩の習熟度が増したことと関わりがあるとも考えられる。

ま と め

老年期まで一通りみたところで、今回の考察で明らかになったことをまとめておく。まず青年期だが、用例が二例とわずかなので、青年期全体の特色を述べるのはもとより困難だが、少なくとも文治四年の九月晦で定家が自分を物語の主人公になぞらえたような記述は以後一切見られないことは確かで、有名な治承四年（一一八〇）の

「庭梅盛開〜」の記事等と合わせて、この時期の日記に定家の感性に満ちた記述が多くなされていたであろうことが予想される。

次に中年期だが、表現こそ定型的でなおかつ簡潔なものとなっているが、定家の現実に対する不満や不安は十分に表されている。また、青年期と同一典拠を踏まえながらも、青年期の様な自己を物語の主人公になぞらえるといった記し方はせず、いわば慣用句的に記述していることから、この時期の定家は簡潔な表現の中に自己の想いを込める傾向があったようである。

それが老年期になると、中年期と同様な記述態度も見られる一方で、非常に文飾を施した記述態度というものも見られる。またその文飾も対句形式や漢詩的表現を用いる等、多分に漢詩からの影響の強い記述の仕方になっている。

以上が今回の考察から伺われた『明月記』における春尽日・秋尽日に関する記述態度の特徴である。大きな特徴としては時期によって同じ話題に対して定家の記述の仕方が変化している事があげられるが、ではこういった記述方法の変化が何によって起きたものなのか、あるいはなぜ漢詩的表現への傾斜が見られるのかといったことが次に問題になるが、今回の考察からはそこまで踏み込んだ言及はできない。今後はさらに『明月記』全体にまで調査を広げ、なおかつ前掲の定家と漢詩に関する先学の成果をも視野に入れて引き続き研究を重ねたい。

〔注〕

(1) 参考までに、春尽日・秋尽日以外の季節の変わり目に関する記述をいくつか挙げておく。

廿九日、晦庚寅天晴、（中略）豈図六十五廻身、霜雪在頭猶遇春、自咲何日今在世、若斟寿考代沈淪、

（嘉禄二年十二月二十九日条）（六十五歳）

（前略）可憐 赤 十九年夏、□之流年過半時、向後定知無再会、晩雲景色独相思、

夏はつるけふのみそきは程もなしわか世いくかとしらぬ月日に　（寛喜二年六月二十九日条）（六十九歳）

(2) 参考までに、石田吉貞氏の時期区分を挙げておく。

青壮年期　一七〜三五歳、初老期　三六〜六〇歳、老年期　六一〜八〇歳。（『藤原定家の研究』昭32　文雅堂書店）

(3) 『狭衣物語』巻一

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青みわたりて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なるに、（後略）

(4) 安貞元年九月三十日条の「短晷」の個所は活字本・訓読本は共に「知晷」としているが、「悲蕭瑟之知晷」では文意が通りにくい上、安貞元年中他の記事では六例全てが「短晷空暮」（九月八日）、「短晷徒暮」（九月十七日）と記されていることから、当該個所も

「短晷」が本来ではないかと考えている。いずれ自筆本で確認したい。

(5) 特に安貞元年九月三十日条の「菊苾」という表現については、『白氏文集』からの影響であろうという指摘が佐藤恒雄氏によって既になされている（「『明月記』の中の白詩(続)」『中世文学研究』第20号　平6・8）。

(6) 「蕭条」「鐘漏」それぞれ初例は、承元元年九月二十九日条（四十六歳）、建暦二年六月十七日条（五十一歳）である。この他にも『明月記』には定家初老期以後に集中的に用いられる語がいくつか見られる。この点については別稿で扱いたい。

※資料中の傍線並びに、（　）内の句読点は私に付した。

〔付記〕本稿は平成十年度広島大学国語学国文学春季研究集会において発表したものを加筆修正したものである。席上、竹村信治先生を始めとして多くの方々に貴重なご意見、ご指導を賜った。改めてお礼を申し上げる。

――ふじかわ・よしかず、広島大学大学院博士課程後期在学――